

鎮西教学の一考察

(特に成立の事情について)

井上正文

鎮西教学とは、古来より広狭の二義に使用されている。即ち鎮西派の教学と、鎮西上人の教学との区別が見られるのであるが、ここでいう鎮西教学とは、鎮西上人の教学を意味するのである。

鎮西上人は、浄土宗第二祖であつて、元祖法然上人の教義を余すところなく、祖述し顯彰して、后世に残されたのである。今私は、この鎮西上人の教学について、その成立の事情を検討したいと思うのであるが、その成立の過程に於いて、外よりは聖道諸宗の非難圧迫があり、内には元祖門下に異義邪説を唱道する者があつたのであるから、まずこれらについて述べ、次にその教学の成立に当つては元祖の教義を祖述するとともに、これを顯彰したのであるから、その二種の態度について、概略を述べたいと思う。

まず元祖に対する聖道諸宗の非難圧迫について述べる。と、解脱上人貞慶の執筆と云われる「興福寺奏狀」に、元祖の浄土宗闢宗について「九ヶ条」の失を挙げ、特にその「第三ヶ条」に「輕釈尊失」、「第四ヶ条」に「妨万善失」を挙げて、唯一向に称名念佛の一行のみを専修する事を非難しているのである。又「第一ヶ条」に「立新宗失」を挙げて、元祖の立教闢宗に當つて、その伝燈敕許なき事を非難しているのである。建暦二年即ち元祖入滅の年十一月明恵上人高弁は、「摧邪論」三卷を著して、元祖の「選択集」を非難しているのである。即ち、「摧邪論」に「變去菩提心過失」を挙げ、「選択集」第四章を始めとして処々に菩提心を廢捨した事を非難したのである。又「以聖道門鬻群賊過失」を出して、「選択集」第八章を非難し、尚重ねて翌年六月「摧邪論莊嚴記」一卷を著して、其の非難を補つていたのである。この他貞応三年に延暦寺から奉つた奏狀に「六ヶ条」を挙げてその「第一ヶ条」に「不可以弥陀念仏建事」と題して、非難しているのである。

次に元祖門下に於ける異義邪説について述べると、建

久二年（元祖五十三才）に行われた「東大寺十問答」を見ると、元祖在世中にして異義邪説を唱道した者が存したのである。又成覚房幸西、法本房行空は元祖在世中に異義を唱道した為に、破門されているのである。いわんや元祖滅后に於いては、鎮西上人の著述にある如くである。即ち「末代念仏授手印」の序文に

上人往生後諍其義於水火致其論於蘭菊還失
念仏之行空廢淨土之業悲哉悲哉為何為何

と云い、又「淨土宗名目問答」巻下の初頭にも、「念仏名義集」巻中にも同様の事が述べてあるのである。これらの分流は「略述淨土教理史」の中で望月信亨氏が指摘された如く安心派と起行派に相分れて各々主義主張を異にしていたようであり、鎮西上人は「末代念仏授手印」に於いて、安心派に属する「一念義」「弘願義」「寂光土義」の三義を邪義として破斥されているのである。これら異義邪説を主張した師は、「淨土法門源流章」にある如く、元祖門下の高弟であつたのであるが、その申よく元祖の正義を継承し、その弘通に努力せられたのが鎮

西上人である。

以上鎮西上人当時の、元祖に対する聖道諸宗よりの非難圧迫、及び元祖門下に於ける異義邪説について概略を述べたのであるが、まず聖道諸宗よりの非難圧迫に対しては、「末代念仏授手印」に

善導宗發行三心五念之法必可具四修法事

と云い、「淨土宗要集」第二、「微選択集」巻下の中にも、淨土宗を善導宗とも云つて、善導大師を表に立てるとともに、「微選択集」巻上に

單聖道門人。單淨土門人不可知之。聖道淨土兼學之人可知之。

と云つて、聖淨兼學の態度でもつて、聖道諸宗に対処され元祖教義の護持顕彰に努力せられたのである。又一方元祖門下の異義邪説を唱道する者に対しては、元祖教義の純正を保とうとして、よくこれらを破斥されたのである。その結果元祖教義の正統伝持の爲の祖述的教義と、種々の状勢に対処して元祖教義を莊嚴する爲の顕彰的教義の二面を有する教学の成立を見たのである。又この事は「我が大師釈尊は法然上人なり」と云つて元祖に絶体

歸依された一方、「單聖道門の人、單淨土門の人は、之を知る可らず。聖道淨土兼学の人は之を知るべし」と云つて、二門兼学を唱道されている事によつても知る事ができる。

西山教義の研究

特に正因正行を中心として

川 本 泰 弘

阿弥陀仏を念ずるにあたつて、願行といつたり、安心起行、または信行といつたり、それが心に在ると願とか安心、信ともいい、それを行為に表わしのを行とか、起行などというのである。これと同じ意味を持つものに、「正因正行」という名目がある。一つの事をいい表わすのに色々の名目を用いられるのは、其の事を言い表わすのに、その時とか場合に應じて色々と變つてくるのである。正因正行は、饒無量寿經に三福九品を以て淨土往生

の正因正行となすということによるのである。善導大師が觀經の正宗分散善義第四に、

「解三輩散善一門之義、就此義中即有其二
一明三福以為正因二明九品以為正行。」

と言はれている。この場合は阿弥陀如来を念ずる事を、三輩散善の一門に望んで解せんとするの正因正行という名目が必要なのである。これを証空上人は、「正因正行」の名目を用いて、教義上の問題を批判したのであつて、この「正因正行」の名目は「觀經散善義他筆鈔」に最も多く用いられている。それでは、正因とは何んであるか、正行とは何であるかという事については、「他筆鈔」上巻に、「凡正因者。直因。即因也」とあり、また「然正因正行。直因直行也。」とも解釈されている。三福正因を総体、九品正行を別相として、これに依りて彼の土の得果にもまた、果と報との別があるとするのである。総体と別相の別である。すなわち自力を脱却した他力の総因を正因といい、他力の別因を正行というのである。三福を以て正因とし、九品を以て正行と為すという語に証空上人の解釈に二つある。その一